〈論　文〉

清末雲南産アヘンの輸出ルートに関する一考察

西川　和孝

要　約

本稿では、従来、等閑視されてきた中国のアヘン輸出の歴史的意義の解明を目指し、その基礎的作業として中国のアヘン生産と輸出の拠点として重要な役割を果たした雲南に焦点を当て、清朝末期における東南アジアに繋がるアヘン交易の実態に迫る。

そこで、雲南におけるアヘンの輸出ルートである、東南アジアに直結する①紅河沿いルート②思茅ルート③騰越ルートと、外省を経由する④広西省龍州ルート⑤広東省北海ルートについて各々の経路と輸出量の検討分析を行い、以下の点を指摘する。即ち、まず、仏領インドシナとのアヘン取引の解禁に伴い、輸出ルートは、外省経由から紅河沿いルートに収斂されていったこと。次に人口が密集するトンキン・アンナンを中心に、低価格を武器にインド産アヘンとの市場競争を有利に進め、急速に普及したこと。そして、最後に、こうしたアヘンの輸出量増加は、雲南の輸入をも下支えすることとなり、結果的に世界経済との結びつきを深化させていった点である。

キーワード

雲南省・アヘン・輸出ルート・東南アジア・世界経済

中国のアヘンを巡る議論については、従来、アヘン戦争に代表されるように19世紀以降に大量に流入したインド産アヘンを中心に輸入という側面が強調されてきた。しかし、近年、林満紅の研究により、19世紀後半には中国本土において流通アヘンは国産に切り替わり、さらにその一部がロシアや東南アジアにも輸出されていた事実が明らかにされている[1]。そこで、本稿では、これまで等閑視されてきた中国産アヘンの外国輸出に関する実態解明の一助とすべく、アヘンの原料となるケシ栽培の代表的な生産地であり、東南アジアに広く接する雲南省に注目する。 1

さて、雲南でケシの栽培が史料上最初に確認できるのは清朝乾隆年間であり、当時は主として薬として使用されていたが、19世紀以降、吸煙の習慣が急速に広がり、周辺地域にも移輸出されるようになった[2]。こうした雲南から輸出されるアヘンに関しては、東南アジア世界との関連性の中で、これまでに一定の研究成果がある。例えば、19世紀後半以降のアヘン輸出が盛んな頃、その主たる担い手であったイスラム商人の動向を中心として、雲南とミャンマーを結ぶ交易路について、やまもとくみこの研

平成28年10月31日受付　平成28年11月23日受理
にしかわ　かずたか：淑徳大学　人文学部　兼任講師

究が[3]、タイと雲南の交易路に関してはヒル（Ann Maxwell Hill）の研究がそれぞれある[4]。また、兼重は、雲南省南部の紅河県に焦点を当て、ケシ／アヘンの生産から東南アジアに繋がる流通、消費までを論じる[5]。このほか、ギエッシュ（C Patterson Giersch）は、雲南省の主要交易ルートの歴史的変遷と経済圏の変化を論じる中で、ベトナムに続く紅河の水運を利用した主要な輸出品の一つとしてアヘンを挙げる[6]。

このように雲南の地域研究において、アヘンは主要なテーマである一方、これまで雲南のアヘンが中国史全体の枠組みの中で論じられることは少なく、その文脈もあくまで中国の国内市場との繋がりにおける主要な生産拠点としての位置づけに止まり[7]、海外市場を念頭に入れた国際的枠組みの中で扱われることはなかった。ここで、アヘンの輸出という視点から、全中国規模で雲南省をとらえ直すならば、アヘンの輸入から自家生産、さらには輸出にいたるアヘンを巡る中国史の中で、雲南省は従来指摘されてきたアヘン生産における主要生産地という側面だけでなく、輸出の前線基地という重要な役割をも担ったと位置づけることができる。

そこで、本稿では、中国史におけるアヘン輸出の意義とそれによって中国にもたらされた影響を解明するべく、その基礎的作業として、主要な輸出拠点であった雲南省に焦点を当て、雲南から外国市場につながるアヘンの輸出ルートとその輸出規模について明らかにする。具体的には、まず初めに雲南から東南アジアへ直接向かうルートを、次に雲南から外省を経由して同じく東南アジアに続くルートについて取り上げ、それぞれのアヘン輸出の実態を解明していくこととする（地図1参照）。

ここでは、アヘンの輸出量とその変遷に基づき量的分析を行うため、歴年の記録が残る海関報告を利用する[8]。ただし、清朝末期の1906年の禁煙運動の高まりに伴い、海関報告にはアヘンの輸出に関するデータは徐々に記載されなくなるため、対象時期を清朝期に限定することとする。

また、アヘンという商品の特殊性も重なり、陸続きである雲南と東南アジアの間では、次節以降説明するように様々な間道を通って大量に密輸が行われた。このように多くの制限はあるものの、当時の幹線ルートのデータを整理することでアヘン輸出の実態の一端に迫りたい。

第1節　雲南・東南アジアルート

本節では、雲南から東南アジアに直接接続するアヘンの輸出ルートについて考察する。この雲南・東南アジアルートは、①南方の仏領インドシナのトンキンに向かう紅河沿いルート、②同じく仏領のラオスおよび英領シャン州に向かう思茅ルート、そして③西方の英領のビルマに繋がる騰越ルートの3つに大きく分類される。それでは、続いて各ルートの詳細について明らかにしていく。

① 紅河沿いルート

2

紅河は雲南省の大理付近を水源とし、哀牢山脈を形成しながら、雲南の中心を東南方向に下り、最終的にベトナムのトンキン湾に流れ込む。そして、この紅河に沿い、あるいは紅河を渡河して輸出されるアヘンの輸出ルートには、紅河の水運を利用する紅河ルートと、臨安府の土司地域を陸路で移動する三猛ルートがある。

まず、紅河ルートであるが、古くは唐代より水運として利用され、上流の雲南省と下流のベトナムを結ぶ有力な運搬手段として寄与してきた[9]。近年では紅河下流に位置するベトナムのハノイ周辺で19世紀初頭に埋められたとされる一括出土銭の中から雲南鋳造の清朝銭がまとまって見つかるなど紅河を介した雲南とベトナムとの密接な経済交流の存在が示唆されている[10]。ただし、19世紀末までアヘンの

輸出は、雲南と仏領インドシナとの間でアヘン取引自体が禁止されていたため、苦力と馬幇で古道を通り、往路でアヘンを運んで行き、帰路で外国製品を持ち帰るという形式で交易が行われていた[11]。しかし、1887年、フランスと清朝の間で結ばれていたアヘン売買を禁止する越南辺境通商章程を改定し、中国産アヘンの陸路輸送による輸出入を認可したことで、フランス側の者が広西省龍州庁、雲南省蒙自県および蛮耗でのみアヘンを購買することが公認された。そして、中国商人は内地で１担当たり銀20両を上限とした釐金税を支払い、フランス側と交易する際にその証明書を提出することなどが規定され、同時に輸入される中国産アヘンの海路による中国への再輸出も禁止された[12]。こうして紅河沿いの蛮耗からジャンク船で紅河に沿って運ばれ、仏領インドシナ国境のラオカイを経由して、トンキンに運ばれるようになった[13]。

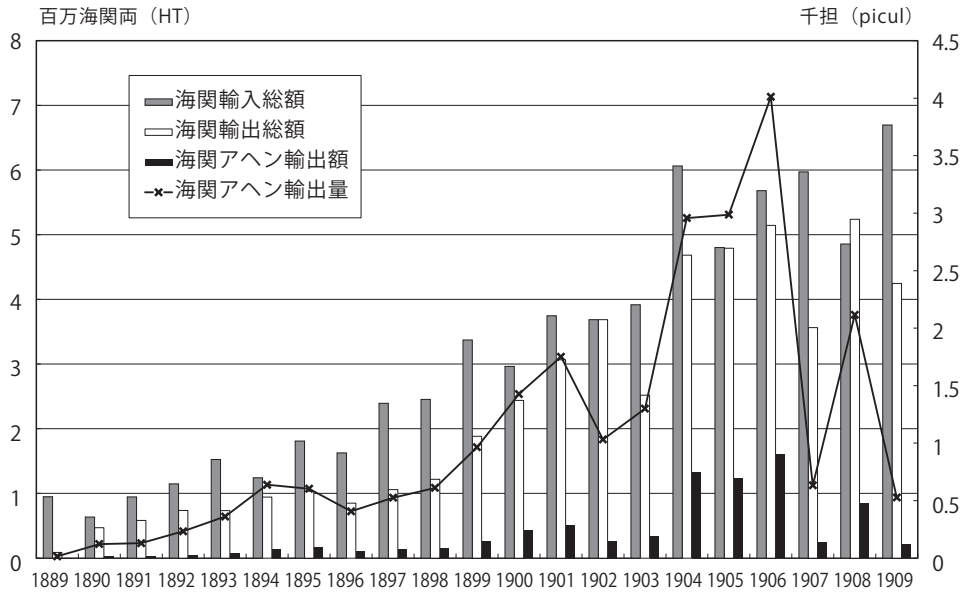
19世紀末になると雲南省にも海関が設置され、貿易の輸出入に関して記録されるようになる。1887年に設立された蒙自海関は、雲南省内の海関の中で時期的に最も早く、主に仏領インドシナ向けの貿易に関して詳細な記述を残している。

そこで、海関報告に基づき、アヘンの記録が残る1889年から1909年までの蒙自海関から輸出されたアヘンの輸出量と輸出額、および総輸出額と総輸入額を整理してグラフ１に示す[14]。輸出量の重量を表す単位「担」は、約60キロに相当する。

グラフ１からアヘンの輸出は、蒙自海関設置当初から1906年まで輸出総額および輸入総額と比例しながら、ほぼ順調に増加傾向にあるが、1906年を境として激しく上下を繰り返しながら急降下していく。これは1906年に開始したアヘンの禁煙運動によって、釐金の税率が、１担当たり上限であった銀20両から116両にまで大幅に上昇したことに起因する[15]。また、禁煙運動開始後、蒙自海関の輸出総額に落ち込みは見られるものの、インド産を中心とした綿糸などの輸入は相変わらず旺盛であった。これは、もう一つの主力の輸出品であった錫の生産による所が大きい[16]。

続いて、アヘンの輸出を時期ごとに区分すると、蒙自海関が開かれた1889年から1894年までが第１期、1895年から1898年までが第２期、1899年から1906年までが第３期、1907年以降が第４期に分類される。第１期では、輸出量は1891年までは100担余りとほぼ横ばいであったが、以降は急速

グラフ１　蒙自海関アヘン輸出量と輸出額（1889–1909年）



3

な伸びを示し、1894年には638担にいたる。こうした要因としてトンキンにおけるアヘン栽培の禁止、トンキンの税関運営の改善に伴うアヘンの販売価格下落などがある[17]。

第２期では、一時的に1896年にアヘンの輸出量は減少するが、1898年には以前の水準に回復しており、全体的にはほぼ横ばい状態である。ちなみに、この1896年の輸出量の減少は、前年に起きたアヘンの収穫高低下による影響であり[18]、この年アヘン価格は１担当たり240海関両から320海関両にまで急騰したため、トンキンでは、インド産アヘンの購入を考慮せざる得ない状況に追い込まれたという[19]。こうした事実は、裏を返せば、当時すでにトンキン市場において雲南産アヘンはインド産アヘンと価格を巡り競合状態となっていたことを意味する。

第３期では、1902年からの一時的な下降を除き、1899年の964担から1906年にはその４倍以上の4012担にまで急増するなど大幅な伸びを示した。とりわけ、1904年からの３年間は、蒙自海関の総輸出額に占めるアヘンの割合は約３割に達する。こうしたアヘン輸出の急伸は、仏領インドシナにおける雲南産アヘンに対する急速な需要の拡大に起因していた。この時期、人口が密集する紅河下流のデルタ地帯では年々顧客が増加しつつあり[20]、それまで習慣的にインド産アヘンを使用していたアンナンの富裕層の間で、価格が半分で香りもよい雲南産アヘンが普及しつつあった[21]。即ち、これは、雲南産アヘンが、仏領インドシナを舞台とした市場競争において、インド産アヘンに対して質および価格の面で優位性を確立していたことを示し、雲南省自体が世界経済に深く巻き込まれつつあったことを意味する。ちなみに1902年からの一時的落ち込みは、フランス植民地政府に任命された請負業者による勝手な取立てに対して、アヘン業者が拒否したために起きた[22]。

第４期では、最初に述べたようにアヘン禁止措置によりアヘンの輸出量は乱高下を繰り返しながら下降する傾向が確認できる。まず、1907年に前年比で約７分の１にまで急降下するが、これは、前年に起きたアヘンの禁煙運動に伴い実施される釐金の税率引き上げ前の駆け込み輸出の反動、将来を見据えてのケシ栽培の自粛、さらに水不足に起因するケシの不作などの要因が重なった結果である[23]。翌年再び増加に転じるが、1909年４月に釐金税が停止されたことで[24]、釐金税納入証明書も発行されなくなり、４月以降の取引は基本的に海関報告に記録されなくなった[25]。

無論、こうした海関報告に記録されたアヘンの輸出以外にも大量の密輸が存在した[26]。例えば、フランスのリヨン商工会議所が組織した調査団が西南中国の経済事情について1895年から97年まで現地調査を行ったが、その成果報告書によれば、雲南から仏領インドシナに運び込まれるアヘンは1000担にのぼり、その半分は密輸であると試算している[27]。このように海関報告の数値自体は不正確なものの、グラフの変動から一定の傾向は読み取ることができよう。即ち、蒙自海関を通過したアヘンの量は、禁煙運動が開始される1906年まではほぼ一貫して増加傾向にあった。そして、この旺盛な需要を支えたのが、仏領インドシナのトンキンおよびアンナンにおける、それまでのインド産アヘンに代わる雲南産アヘンの普及であった。

4

続いて三猛ルートを見ていく。三猛とは、臨安府江外の土司地域である三猛地域（猛喇、猛頼、猛梭）を指し、現在の雲南省南部の金平県からベトナム北部一帯に当たる。

当時の仏領インドシナに輸出されるアヘンのルートとして、紅河沿いに水運を利用して運搬するほかに、三猛地域を経由して仏領インドシナに運び込むルートが存在した。このルートでトンキンに運ばれたアヘンの量は、1897年には全輸出量525担のうち177担、1898年には611担のうち42担にそれぞれのぼった[28]。さらに三猛ルートにはトンキンに向かう以外に、枝分かれしてそのまま南下し、現在のラオス北部に密輸されるルートも存在した。19世紀末ごろには、開化府で栽培される2000担のアヘンのほとんどが、仏領インドシナに密輸され、そのうちの1200担が、現在のベトナムの莱州（Laichou）

を経由して、ラオス北部のルアンパバーン（Luang Prabang）にまで運ばれていたとされる[29]。

三猛地域は、清朝と仏領インドシナの国境地帯に当たり、形式上は地域の有力者である土司が管理する形をとっていたが[30]、土司自身はルアンパバーンやベトナムと独自に服属関係を築くなどしており、清朝の行政の監視は極めて届きにくく、容易に密輸できたと推測される[31]。

② 思茅ルート

雲南南部に位置する思茅庁は英領シャン州（British Shan States）や北ラオスに近接し、北は大理府や雲南府に通じる交通の要衝である。そして、思茅を経由する隊商は、チベット、四川、貴州、江西などからシャム（Siam）、ビルマの沿岸部までを結ぶ広大なネットワークを形成していた[32]。アヘンの輸出もこうしたネットワークを活用して行われた交易の一部である。

さて、思茅経由で輸出されるアヘンであるが、思茅産は少なく、大理府やメコン川とミャンマー国境の間にある猓黒山産が多くを占め、六順や元江周辺のものも含まれていた[33]。そして、こうして栽培されたアヘンは、イスラム商人を中心とする隊商によって英領シャン州、シャム、ケントゥン（Kengtung）、チェンマイ（ChiangMai）などに運ばれた[34]。

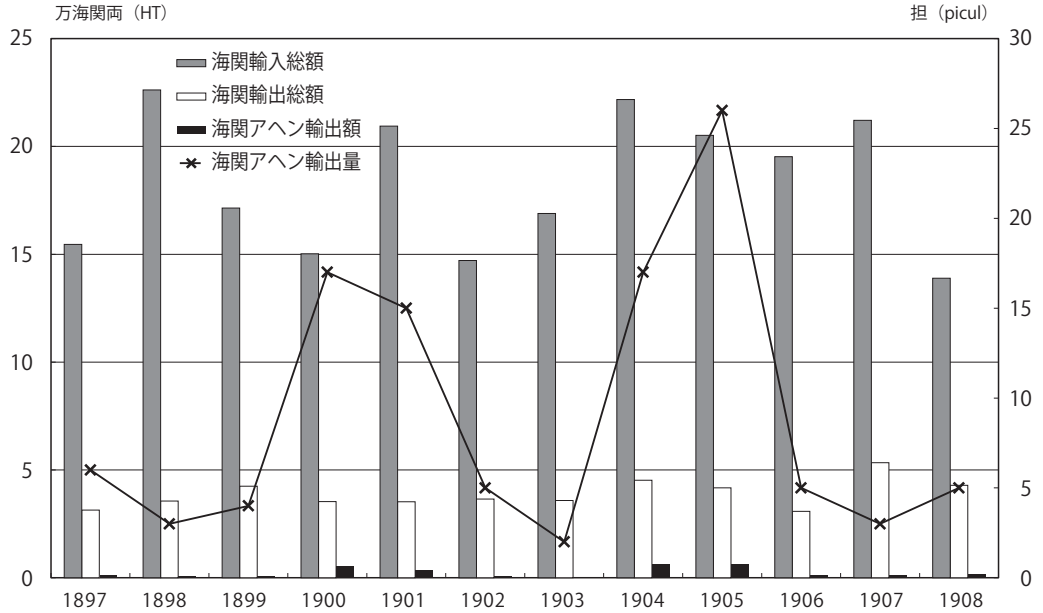
続いて、思茅海関を通過して運ばれたアヘンの輸出量を具体的に見ていくこととする。次に見えるグラフ２は、海関が設置された1897年からデータが残る1908年までを整理し示している[35]。

グラフ２より1897年から1908年までの間の正式に思茅海関を通過したアヘンの輸出量は、最低時は1898年の３担、最高時でも1905年の26担に止まっており、蒙自海関に比して極めて少量であった。また、思茅海関の輸出総額は３万海関両から５万海関両の間で年ごとに大きな変化は見られない一方、アヘンの輸出額はこれに反して激しい上下を示している。

次に、アヘンの輸出を時期ごとに区分すると、思茅海関が開かれた1897年から1899年までが第１期、1900年から1905年までが第２期、1906年から1908年までが第３期と分類される。

第１期は初年度から輸出量が徐々に下降気味になるが、その原因の一つとして大雨などによる天候不順が挙げられる[36]。

グラフ２　思茅海関アヘン輸出量と輸出額



第２期は、輸出量が、一時期大きく低下するものの、概ね15担超えるなど、第１期に比して高い数値を記録している。まず1900年に飛躍的増加を示すが、これはイスラム商人が実験的試みとして、ケントゥンやチェンマイに売り込むために持ち出した影響による[37]。こうした挑戦は、ある程度成功したようで1905年にはビルマ向け10担、シャム向け９担、トンキン向け７担で、合計26担を記録する[38]。ちなみに1902年から翌年にかけてアヘンの輸出量に大幅な低下が見られるが、これは四川産アヘンの不足により雲南東部でアヘン価格が上昇したことで、当該地域のアヘンが雲南東部に流出してしまったためである[39]。

第３期は、アヘンの禁煙運動の影響もあり、それまでに比べて大きく輸出量を下げ、５担前後で推移しており、1908年を最後に海関報告から記録がなくなる。

こうした思茅ルートを介したアヘン取引の特徴の一つとして、アヘン吸煙そのものを目的とする他に、物々交換としての手段も含まれていた[40]。

また、これら正規の取引のほかに、山間の小道を利用した密輸が盛んに行われていた[41]。この規模について、リヨン報告書では、19世紀末頃、英領シャン州やシャム向けなどのアヘンの輸出は、1000から1500担と見積もった上で、アヘンに代わって様々な商品が思茅海関を通って輸入されていたとあり[42]、グラフ２における輸出総額と輸入総額の大きな差異を生む要因になっていたことがわかる。

このように思茅ルートによるアヘンは、英領シャン州、ラオス、シャムなどに密輸を中心としてかなりの量が輸出されており、地域の購買力を底支えすると同時に物々交換としての役割も担っていた。

③ 騰越ルート

滇西地区の交通の要衝である騰越庁（現在の騰衝市）には1900年に海関が設置され、1902年から正式に海関としての業務が開始された[43]。しかし、1894年にビルマと清朝との間でアヘン取引が禁止されたため、ルートを含め具体的な輸出に関する記録は海関報告には残っていない。ただし、ビルマではイギリス政府によりアヘン価格が高く設定されており、相対的に安い雲南産アヘンの密輸入が絶えなかったという[44]。リヨン報告書では、トンキンの人口当たりのアヘン消費量から試算して、人口密度の低い北ビルマへの密輸量は400から500担と推測している[45]。

こうして密輸されるアヘンは、辺疆の隔離された山間部でケシ栽培を営むカチンやリス（現在の中国の民族分類では傈僳族）といった土着の人々に支えられていた[46]。ケシ栽培は、1906年にアヘンの禁煙運動が開始されたのちも、雲南ビルマ国境に沿う政府の管理が行き届かない大小猛統、孟定、葫蘆王地などの土着民が居住する地域を中心に継続され[47]、1930年代においても最も主要な産品であり続けた[48]。

以上より、①紅河沿いルート②思茅ルート③騰越ルートをまとめると、清末における雲南・東南アジアルートを介したアヘンの輸出は、雲南産アヘンの価格面における優位性を背景に、人口密集地であるトンキン・アンナンを中心に、ビルマを含む東南アジアの広い地域で普及しつつあり、全体的に増加傾向にあった。

6

第２節　外省経由ルート

第１節で述べた雲南省から直接外国に輸出されるアヘンのほかに、外省を経由して運ばれるケースも存在した。こうした事例として広西省の龍州庁を経由するルートと広東省北海を経由するルートがある。

① 龍州ルート

広西省の龍州庁は、トンキンとの境に位置し、1889年に海関が設置された。龍州庁に運ばれる雲南産アヘンは、一般的に雲南東南部の広南府産のものであり[49]、雲南省東南の玄関口に当たる剥隘から隣接する広西省百色庁に移出され、右江に沿って南寧府を経由するか、あるいは陸路で帰順府と太平府を通り、龍州庁にまで運ばれ、最終的にその一部がトンキンに輸出された[50]。そして、海関報告によれば、19世紀末の時点で広西省内に移入された18000担から25000担のうち、５割から６割が雲南産、３割から４割が貴州産、１割から２割が四川産であり、省内で消費される３分の２を除き、残り３分の１が広東やトンキンに運ばれたとあり、龍州庁にはその中から900担が移入され、４割が雲南産、６割が貴州産でそれぞれ占められ、500担が地元で消費され、残り400担がトンキンへ密輸されたという[51]。龍州庁の海関を通過して輸出されたアヘンについてはわずかではあるが、海関報告に記録が残っているので、以下の表１に整理して示しておく。

表１によると、龍州庁を通して輸出されるアヘンは貴州産がそのほとんどを占め、雲南産はわずかに過ぎない。これは、先述したように1889年に仏領インドシナとの間でアヘン取引が解禁され、紅河沿いルートが正式に開通したためであろう。

また、記録上では輸出が存在しない年が多々あるが、これは密輸されているためである。例えば、1891年の海関報告では「いかなる国産アヘンも海関を通過しておらず、トンキンに向かうすべてのアヘンは密輸である」とあり[52]、1901年の海関報告でも密輸量は400担にのぼるとする[53]。さらに翌年の海関報告には密輸量は350担であると指摘した上で、密輸の実態について、仏領インドシナと広西

表１　龍州海関におけるアヘンの輸出量と輸出額

	貴州省産アヘン		四川省産アヘン		雲南省産アヘン	
	輸出量（担）	輸出額（海関両）	輸出量（担）	輸出額（海関両）	輸出量（担）	輸出額（海関両）
1889	0		0		0.38	98
1890	0		0		0.62	119
1891	0		0		0	0
1892	0		0		0	0
1893	0		0		0	0
1894	60.62	15320	0		1.26	396
1895	64.58	16463	20	5531	8.87	2729
1896	10.64	2800	25	6840	0.38	126
1897	0		0		0	0
1898	0		0		0	0
1899	0		0		0	0
1900	0		0		0	0
1901	0		0		0	0
1902	0		0		0	0
1903	16.62	8902	0		0	0
1904	134.24	81733	0		3.57	2000
1905	107	53111	0		0	0
1906	65	31447	0		0	0
1907	0	0	0		0	0
1908	101	63993	0		0	0
1909	150	108000	0		0	0
1910	372	594592	0		0	0
1911	49	93613	0		0	0

典拠：Trade Reports,1889-1911, Lungchow

7

省の国境地帯のインドシナ側にアヘン密売人の村が存在し、トンキンの業者が頻繁にここを訪れ、アヘン取引を行っていたとしている[54]。

このほか、表1から、1896年と1904年の間では、輸出額と輸出量の比較を通して、明らかなアヘン価格の高騰が確認できる。これは、雲南省と広西省龍州庁を結ぶ沿線上における治安が悪化したことによる[55]。

ちなみに1910年に貴州産アヘンの輸出量が増加したのは、雲南でのアヘンの釐金税納入証明書の発行が停止され、雲南経由で仏領インドシナに輸出できなくなったためである[56]。

以上より鑑みれば、雲南産アヘンの龍州庁経由での仏領インドシナへの輸出は、1889年以降も量的には僅かであるが、密輸という形式で継続していたと考えられる。

② 北海ルート

トンキン湾に臨む港町である現在の広西省北海市は、当時広東省に属しており、1877年にこの地に海関が設置された。

北海に運び込まれる雲南産アヘンは、龍州同様に多くが広南府産で占められ、運搬ルートに関しても雲南省剥隘から広西省百色庁を通り、右江に沿って南寧府にいたり、北海に運ばれていた[57]。密輸についても主要な町は避けつつ同様のルートを辿った[58]。

さて、北海ルートについては、1878年の海関報告によれば、わずか数年前までは大量の雲南産アヘンが北海からアンナンに向けて輸出されていたとあり、同報告に記載されている広西省在住のフランス人司教の情報として、トンキンのハイフォンに港が開設されて以降、雲南貿易を巡り北海との競争が激しくなり、数年前までは北海に雲南産のアヘンを運び、代わりに綿と外国製品を持って帰る数百頭からなる大規模な馬の隊商が最近ではほぼ見かけなくなり、彼らは現在トンキンに向かっており、雲南からのルートは途絶えたと伝えている[59]。

そうした一方で、1885年から翌年にかけて行ったボーンの調査報告によると、当時雲南省のアヘン取引の主要な集散地であった通海県から毎年5000担のアヘンが、雲南省東南部の剥隘を通って北海に移出されていたとあり、北海経由でのアンナン向けの輸出が継続されていた可能性が示唆されている[60]。事実、1884年の海関報告には、アヘン煙膏（crude opium）2.76担（＝828海関両）、精製アヘン（prepared opium）0.42担（＝272海関両）が船積みでアンナンに向けて送られたとあり[61]、規模は縮小しながらも輸出は継続されていた。

ただし、1900年代になると、それまでとは逆にトンキン経由で北海にアヘンが輸入される現象が生じている[62]。おそらく、雲南から北海までの陸上ルート沿いの治安悪化に伴い[63]、紅河ルートを介して北海の市場にアヘンを供給しようしたためであろう。もともと北海周辺には、北海を含む廉州府、雷州府、高州府により巨大なアヘン市場が形成されており、雲南産および貴州産の国産アヘンのみで年間消費量は4000担から5000担にのぼった[64]。そして、この地域では雲南産アヘンとインド産アヘンを1対3の割合で混用する習慣があり、内陸に進むほど雲南産アヘンの混合率が高まったという[65]。加えて、この頃、北海ではインド産アヘンの価格上昇により、アヘンの輸入が激減し、相対的に安価な国産アヘンの取引が増加しつつあったこともこうした動きを後押しした大きな要因であろう[66]。即ち、北海は中継貿易港だけでなく、消費地としての側面も有しており、当地における雲南産アヘンの旺盛な需要が、相対的な雲南産アヘンの価格下落とともに、輸出から輸入へと転換させていったといえよう。ここにも雲南産アヘンが、世界経済におけるアヘンの価格競争に深く関与しつつあったことがうかがわれる。

こうしたことから仏領インドシナのハイフォンに港が設置されるまでは、北海は仏領インドシナ向け

8

の重要な中継貿易港として栄え、その後は輸出量を減少させていき、紅河沿いルートによるアヘン取引の増加とともに、1900年以降は北海ルートを介した雲南産アヘンの輸出はほぼ途絶えてしまったと考えられる。

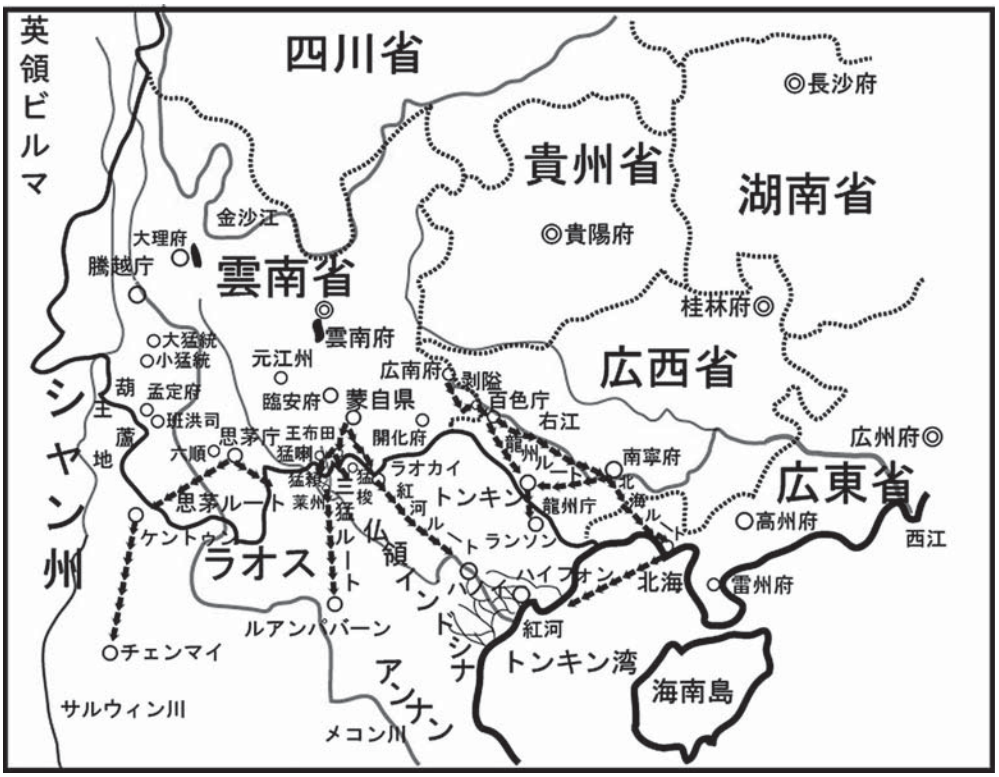
ここで本節をまとめると、外省経由の仏領インドシナ向けのアヘンの輸出は、雲南とインドシナ間で正式に取引が始まったことで紅河沿いルートに集約されていった。

結論

本稿では、清末における、雲南省から東南アジアに向けて輸出されるアヘンについて検討してきた。その内容をまとめると、輸出ルートは、雲南・東南アジアルート（①紅河沿いルート②思茅ルート③騰越ルート）と外省経由ルート（④広西省龍州ルート⑤広東省北海ルート）に分類され、紅河の水運を利用したアヘン取引が正式に認可されたことを契機に、外省経由の輸出ルートは紅河沿いルートに収斂されていった。そして、輸出された雲南産アヘンは、仏領インドシナでのインド産アヘンとの価格競争に象徴されるように東南アジアにおいて市場を獲得し、時間の経過とともに英領ビルマや仏領インドシナで普及していくこととなったのである。そして、その結果、密輸も含めたアヘンの輸出量の増加は、雲南の輸入をも下支えすることとなった。民国期には、主要輸出品である錫相場の記録的な暴落により錫の輸出額が半減し、雲南省が輸入超過に陥った際、阿片の密輸出をして省の財源を賄うことにもなった[67]。

このようにアヘンの輸出を媒介として、直接的あるいは間接的に、また陸路あるいは海路により、雲

地図１　清朝末期におけるアヘン輸出ルート



典拠：*Decennial Reports 1892−1901*, Vol.2 Mengtsz, p.468、譚其驤主編『中国歴史地図集』清時期（1982年、地図出版社）を参考に作成

南省が東南アジア世界を通して世界経済と結びついていったことが明らかになった。以前、筆者は、雲南南部の茶と錫の輸出を通した雲南と世界経済とのつながりについて指摘したが、本論文のテーマとするアヘンは、栽培地あるいは生産地が限定される茶や錫と異なり、雲南全体に広がっていた[68]。そのため、国際的なアヘン交易がもたらす影響力とその範囲は、茶や錫と比較してはるかに巨大となった。そして、このアヘンの輸出によって雲南省、あるいは栽培地である地域レベルに還流する富がもたらした変化とその影響については、稿を改めて論じていきたい。

註

1 林満紅　木越義則訳「清末における国産アヘンによる輸入アヘンの代替（1805-1906）：近代中国における「輸入代替」の一事例研究」『近代東アジア経済の史的構造：東アジア資本主義形成史Ⅲ』日本評論社，2007, pp.57-113。林満紅　木越義則訳「中国産アヘンの販売市場（1870 年代～1906 年）」『東方学報』78, 2006, pp. 241-278。

2 秦和平『雲南鴉片問題與禁煙運動：1840-1940』四川民族出版社，1998。

3 やまもとくみこ『中国人ムスリムの末裔たち：雲南からミャンマーへ』小学館，2004。

4 Ann Maxwell Hill, *Merchants and Migrants: Ethnicity and Trade among Yunnanese Chinese in Southeast Asia, Yale University Southeast Asia* Studies, 1998, pp.41-43.

5 兼重努「ケシ／アヘンから描く地域生態史：中国・雲南省紅河県の事例研究」『論集モンスーンアジアの生態史：第２巻地域の生態史』第４章，2008, pp. 81-100.

6 C. Patterson. Giersch. “Cotton, Copper, and Caravans: Trade and the Transformation of Southwest China". In *Chinese Circulations : Capital, Commodities, and Networks in Southeast Asia,* edited by Eric Tagliacozzo and Wen-chin Chang, Duke University Press, 2011, pp. 37-61.

7 David Anthony Bello, “*Opium and the Limits of Empire: Drug Prohibition in the Chinese Interior, 1729-1850*”, Harvard University Press, 2005, pp. 222-285、秦和平　前掲書２）pp. 52-91。

8 海関報告の概要や雲南省の海関設置の経緯に関しては、西川和孝『雲南中華世界の膨張：プーアル茶と鉱山開発にみる移住戦略』（慶友社，2015, pp. 209-210）を参照されたい。

9 藤澤義美『西南中国民族史の研究：南詔国の史的研究』大安，1969, pp. 84-88。

10 三宅俊彦「東アジア銭貨流通におけるベトナム出土銭の位置づけ」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』国際文化研究所，12, 2009, pp. 178-186。

11 *Report by Mr. R. S. A. Bourne of A Journey in South-Western China*, Presented to both Houses of Parliament by Command of Her Majesty, London, 1888. p. 27.

12 林満紅 前掲論文１）pp. 241-278。

13 *Trade Reports 1897*, Mengtsz, p. 643.

14 グラフ I は、China Imperial Maritime Customs, *Returns of Trade and Trade Reports*, Published by Order of the Inspector General of Customs, Shanghai（以下 *Trade Reports* と略称）1889-1909, Mengtsz から作成。

15 Diplomatic and Consular Reports, China, Annual Series, *Report of Mengtzu for the Year 1906*, Presented to both Houses of Parliament by Command of Her Majesty, London,1907, p. 8.

16 西川和孝 前掲書 8）pp. 210-214。

17 *Trade Reports 1893*, Mengtsz, p. 592.

18 *Trade Reports 1896,* Mengtsz, p. 592.

19 *Trade Reports 1895,* Mengtsz, p. 584.

20 *Trade Reports 1900,* Mengtsz, p. 712.

21 *Trade Reports 1901,* Mengtsz, p. 740.

22 *Trade Reports 1902,* Mengtsz, p. 825.
23 *Trade Reports 1907,* Mengtsz, p. 634.
24 『雲南清理財政局調査全省財政説明書初稿』雲南清理財政局、1910 年、不分巻、歳入部、釐金、1 頁。原文には、「宣統元年実行禁煙，停収土薬釐税」とある。
25 *Trade Reports 1909,* Mengtsz, p. 751.
26 *Trade Reports 1894,* Mengtsz, p. 602.
27 Chambre de Commerce de Lyon, *La Mission Lyonnaise d'Exploration Commerciale en Chine*, 1895-1897, 1898, Deuxième Partie Rapports Commerciaux et Notes Diverses, pp.135-136. 以下 *La Mission Lyonnaise d'Exploration Commerciale en Chine* とのみ記述。
28 *Trade Reports 1897*, Mengtsz, p. 643 ; *Trade Reports 1898,* Mengtsz, p. 666.
29 China Imperial Maritime Customs, *Decennial Reports, on the Trade, Navigation, Industries, etc., of the Ports Open to Foreign Commerce in China, and on the Condition and Development of the Treaty Port Provinces, 1892-1901,with Maps, Diagrams, and Plans, Southern Ports, with Appendices,* Published by Order of of the Inspector General of Customs, Shanghai（以下 *Decennial Reports, 1892-1901* と略称），Vol. 2 Mengtsz, p. 475.
30 方国瑜『中国西南歴史地理考釈』台湾商務印書館，1987，pp. 1275-1278。
31 武内房司「地方統治官と辺疆行政：十九世紀前半期、中国雲南・ベトナム西北辺疆社会を中心に」『近世の海域世界と地方統治』汲古書院、2010, pp. 171-201。
32 *Decennial Reports 1892-1901*, Vol. 2. Szemao, p. 479.
33 *Decennial Reports 1892-1901*, Vol.2. Szemao, p. 485.
34 Ann Maxwell Hill 前掲書 4）pp. 41-43.
35 グラフ 2 は、*Trade Reports, 1897-1908*, Szemao から作成。
36 *Trade Reports 1899,* Szemao, p. 735.
37 *Trade Reports 1900*, Szemao, p. 727.
38 *Trade Reports 1905*, Szemao, p. 537.
39 *Trade Reports 1902*, Szemao, p. 843.
40 *Trade Reports 1901*, Szemao, p. 756.
41 *Trade Reports 1897*, Szemao, p. 660; *Trade Reports 1898*, Szemao, p. 681.
42 *La Mission Lyonnaise d'Exploration Commerciale en Chine,* p. 135.
43 China the Maritime Customs, Decennial R*eports, on the Trade, Industries, etc., of the Ports Open to Foreign Commerce, and on the Condition and Development of the Treaty Port Provinces, 1902-1911, Southern and Frontier Ports, with Appendix*, Published by Order of the Inspector General of Customs, Shanghai（以下 *Decennial Reports, 1902-1911* と略称），Tengyueh, p. 301.
44 *Decennial Reports 1902-1911*, Tengyueh, p. 305.
45 *La Mission Lyonnaise d'Exploration Commerciale en Chine,* p. 136. 11
46 *Decennial Reports 1902-1911*, Tengyueh, p. 305.
47 *Trade Reports 1910*, Tengyue, p. 810.
48 周光倬編『滇緬南段末定界調査報告』（民国 24［1935］年刊）、四班洪区域概況（5）経済状況和民族生活、p.45。原文に「現在之出售者 , 以鴉片為大宗」とある。
49 *Trade Reports 1891*, Lungchow, p. 584.
50 *Decennial Reports 1892-1901*, Vol. 2 Lungchow, pp. 436-437.
51 *Decennial Reports 1892-1901*, Vol. 2 Lungchow, pp. 435-436.
52 *Trade Reports 1891*, Lungchow, p. 584. 同様の記述は、*Trade Reports 1892*, Lungchow, p. 581; *Trade Reports,*

1896, Lungchow, p.584 にも見える。

53 *Trade Reports 1901*, Lungchow, p.727.

54 *Trade Reports 1902*, Lungchow, p.812.

55 *Trade Reports 1900*, Lungchow, p.700.

56 *Trade Reports 1910*, Lungchow, p.779.

57 *Commercial Reports from Her Majesty's Consuls in China for the year 1877*, Pakhoi, Presented to both Houses of Parliament by Command of Her Majesty, London, 1878. p.122.

58 *Deccennial Reports 1892-1901*, Vol.2 Pakhoi, p.412.

59 *Trade Reports 1878*, Pakhoi, p.296.

60 *Decennial Reports 1882-1891*, Vol.2 Mengtsz, p.668.

61 *Trade Reports 1884*, Pakhoi, p.372, p.380.

62 *Trade Reports 1906*, Pakhoi, p.512. 1906 年に雲南産アヘン 7.6 担が北海に輸入される。

63 *Trade Reports 1900*, Lungchow, p.700.

64 *Deccennial Reports 1892-1901*, Vol.2 Pakhoi, p.412.

65 *Trade Reports 1889,* Pakhoi, p.511.

66 *Deccennial Reports 1892-1901*, Vol.2 Pakhoi, p.411.

67 台湾総督府官房調査課編（糠谷廉二著）『雲南省事情（其三）』1924 年、第一一章、pp.21-22。

68 *Decennial Reports 1892-1901*, Vol.2 Mengtsz, p.460. 当時、大理を中心とする雲南西部の生産量のみで 32000 担にのぼり、その他の雲南府、昭通府、東川府、曲靖などの雲南東部が 14000 担、臨安府の蒙自県、開化府、広南府などの雲南東南部でも 8000 担になるとしており、雲南の多くの地域でアヘンが栽培されていた。

12